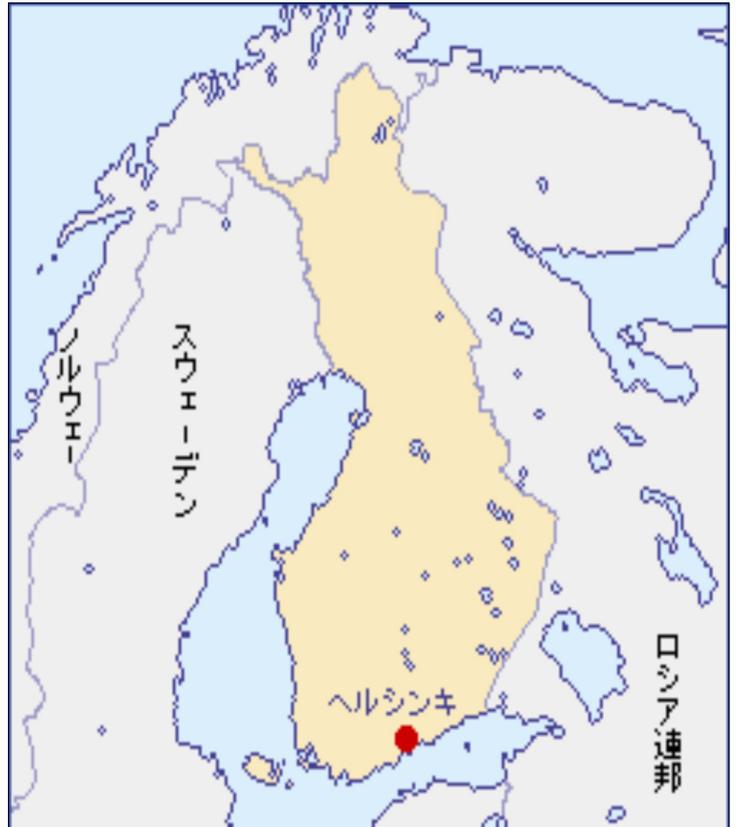


歌詞(詩)で辿る「フィンランディア讃歌」

今回は、合唱団「コールピース」のスタートになったシベリウスの「フィンランディア讃歌」についての研究です。合唱が付されたのは、交響詩「フィンランディア」の一部で、曲のやや後半部の2分程度です。この美しい旋律部分はさまざまに歌詞が付けられて歌われています。近年では、この部分だけでなく全曲に詞(詩)を付した曲が生まれています。そこで、交響曲としては“交響詩「フィンランディア」”とし、歌曲としては「フィンランディア讃歌」と呼ぶことにして区別してみました。

美しい旋律にコトバを付けて歌ってみたいという気持ちは、どうやら世界共通のようです。しかし、コトバというものは不思議なものです。人から人へ伝える、メッセージでもあります。まず音声であり、その音調(語調)、また語彙によって意味性が異なってきます。本稿では、4つの「フィンランディア讃歌」を取り上げてアナリーゼ(分析)を試みています。とてもアナリーゼといった出来具合ではないのですが、素材として考えてみるきっかけになればいいのではないかと思います。今回の主役は4つの歌詞です。敬称は略させていただきます。

(バス：桐田豊正)



フィンランドの地図。図で黄色の部分。東にロシア、西にスウェーデンが位置している。かつては北極海(バレンツ海)、南東部はラドガ湖にも面していた。地図は外務省ホームページより。

構成

1. 交響詩「フィンランディア」の誕生
2. コスケンニエミの作詞
3. ロイド・ストーン英語詞
4. 関忠亮の日本語詞
5. 唐沢史比古の全曲日本語詞

1. 交響詩「フィンランディア」の誕生

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス(1865~1957)によって、1900年に作曲された。当時のフィンランドは帝政ロシアの支配下であり、ロシア語の強制などに対する国民の不満は高まっていた。1899年、新聞社主催の歴史劇が上演され、その伴奏曲としてシベリウスが「フィンランドは目覚める」という全8曲を作曲した。その最終章を翌年改稿して交響詩「フィンランディア」が完成した。

2. コスケンニエミの作詞

第2次世界大戦のおり、フィンランドは枢軸国側に立ってソ連と交戦した。そのさなか1941年、詩人のヴェイッコ・アンテロ・コスケンニエミ（1885～1962）が中間部の美しい旋律部分に歌詞を付けた。コスケンニエミはトゥルク大学文学史の教授でもあった。シベリウスは、まだ存命中であり、原曲を合唱用に喜んで編曲した。これが、現在、「フィンランディア讃歌」と呼ばれる合唱曲である。コスケンニエミの詞を、言語学者松村一登氏（東大文学部言語学科卒 同大文学部文化交流研究施設教授）の訳で紹介しておきます。（本ページ下）

Suomi（スオミ）というのは、フィンランド人の自称である。フィンランドは通称で、日本語表記での正式国名はフィンランド共和国、これはスウェーデン語のRepubliken Finlandを訳したものである。フィンランド自身はSuomen tasavalta（スオメン タサヴァルタ）と称している。

松村氏の訳はコスケンニエミの原詩を忠実に訳したもので、歌曲の詞として訳したものではないことに留意したい。松村氏が「蛇足」として記した解説も引用しておきたい。（太字は引用）

独立前のロシア領時代を「夜」（yö）「夜の支配」（yön vallat）「隷属」（orjuus）「圧政」（sorto）など、独立を「朝」（aamu, päivä）「明るい輝き」（kirkkaus）「朝の明るさ」（aamun valkeus）などのことばを使って対比させ、さらにその2つを「追い払う」（karkoittaa）「克服する」（voittaa）「（夜が）明ける」（koittaa）などの動詞で関係づけるという、誰にもわかる単純明快な歌詞になっている。

コスケンニエミの詩で特徴的なことを挙げてみよう。内容は「愛国的」ではあるが、決して「侵略的」ではない。夜の支配や隷属、圧政を「追い払い」はしても、相手（国）を侵略する意図や考えは、まったく見られない。ましてや、相手（国）を侮蔑するものでもない。ただ、他民族の支配と圧政をはねのけたことを誇らかに世界に示す内容である。コスケンニエミという詩人、人となりを知ることができないのが残念だが、この詩（詞）をフィンランド人が受け入れ、第2の国歌としてうたっていることのほうが大事だろう。

コスケンニエミによる「フィンランディア讃歌」（1941年）

原詩（フィンランド語）

Oi Suomi, katso, sinun päiväs koittaa,
yön uhka karkoitettu on jo pois,
ja aamun kiuru kirkkaudessa soittaa
kuin itse taivahan kansi sois.
Yön vallat aamun valkeus jo voittaa,
sun päiväs koittaa, oi synnyinmaa.

Oi nouse, Suomi, nosta korkealle
Pääs seppelöimä suurten muistojen,
oi nouse, Suomi, näytit maailmalle
sa että karkoitit orjuuden
ja ettet taipunut sa sorron alle,
on aamus alkanut, synnyinmaa.

松村一登 訳

おお、スオミ、見よ、お前の夜明けだ
お前を脅かす夜は遠くへ追い払われ
ヒバリが、輝く朝の歌を歌っている
まるで空自身が奏でているようだ
朝の光が夜の闇の力に打ち勝ち
お前の朝が明けたのだ、祖国よ

さあ立ち上がれ、スオミ、高々とあげよ
偉業の記憶の花束で飾られた自分の頭を
さあ立ち上がれ、スオミ、お前は世界に示した
他民族による支配をはねのけたことを
圧政に屈しなかったことを
お前の一日が始まるのだ、祖国よ

出所：<http://www.suomi.kmatsum.info/essays/finlandia.html>

3. ロイド・ストーン英語詞

「フィンランディア讃歌」には日本語詞バージョンがいくつかある。最も多く歌われているのは、関忠亮の作品である。「七つの海越え響け 遙かの国の人へ」で始まる。

実は関忠亮の日本語詞は、米国人のロイド・ストーンの英語詞をもとにしている。ここに本稿にとって最大の謎というか難所がある。というのも、ロイド・ストーンが英語詞をつくったのは1934年とされているからである。コスケンニエミの詩（詞）は1941年（一説には1940年）とされるから、その7年前になる。これをどう受け止めればいいのか謎であるが、まず、ロイド・ストーンの英語詞を見てみる（本ページ下）。

つたない直訳で申し訳ないのですが、意味だけはつかめることで勘弁していただきます。

目を引くのは、歌の出だしが「This is My song（これは、私の歌だ）」で始まっていることだ。この出だしが、ストーンの並々ならぬ自負と感動を語っている。日の光は私が住む国だけでなく離れた国々にも降り注ぐと平和を訴えます。

次に作詞（英語詞）が1934年ということについて考えてみたい。これは、ロイド・ストーンがシベリウスの交響詩「フィンランディア」を聴いて、後半の美しいメロディ、フィンランディア讃歌と呼ばれる箇所に深い感動を受けて作詞したと解するしかないだろう。生まれた母国とは関係なく、独立して生まれた作品といえる。ネットでストーンに関する英語版の資料を追いかけても、1934年作詞やシベリウスの「フィンランディア」に基づくものとは記されていても、いきさつや動機についての記述はない。

1934年という時代を振り返ってみると、第2次世界大戦を控えた激動の時代である。1934年は日本の元号では昭和9年。前年3月には、満州国問題で日本は国際連盟を脱退する。また、西ではナチスが政権を獲得しヒトラーがドイツ首相に就く。ユーラシア大陸の東と西で、きな臭い動きが出てくる。大戦前夜である。ストーンは間近にせまる平和の危機を感じたのであろう。「A song of peace」は自分の国だけでなく他国の人々すべてのために、「sunlight beams」はわけへだてなくすべての国民に降り注がねばならない。国境を超えた歌が生まれた、と言える。以下、「This is My song」版と略記します。

この「This is My song」版がどのようにして米国に広がったのか。それを確かめることは、今のところできない。しかし、YouTubeでは現在でもいくつかアップされていて聴くことができる。ハーバード大学男声合唱団のものは、忠実にロイド・ストーンの詩（詞）にもとづいている。

ロイド・ストーンは1912年の生まれ（1993年没）。ネット百科事典「Wikipedia」の英語版人物紹介によ

Lloyd Stone (ロイド・ストーン) による英語詞 (1934年)

ロイド・ストーンの英語詞

This is my song, Oh God of all the nations,
A song of peace for lands afar and mine.
This is my home, the country where my heart is;
Here are my hopes, my dreams, my sacred shrine.
But other hearts in other lands are beating,
With hopes and dreams as true and high as mine.

My country's skies are bluer than the ocean,
And sunlight beams on cloverleaf and pine.
But other lands have sunlight too and clover,
And skies are everywhere as blue as mine.
Oh hear my song, Oh God of all the nations,
A song of peace for their land and for mine.

直訳 (by Kirita)

これは私の歌だ オー すべての国々の神よ
遠くの国々 また私の国の平和のための歌だ
これは私が安息するところ 心が安らぐ故郷だ
ここには私の希望がある 夢がある 聖なる殿堂だ
他国の人たちの心も鼓動しているのです
私と同じように 高い希望と夢を伴って

私の故郷の空は 海よりも深い青色です
日の光はクローバーや松の木に降り注いでいます
同じように 他の国々にも光は降り注いでいます
空は どこでも私の故郷と同じように青いのです
私の歌を聴いてください オー すべての人の神よ
私のため すべての人々のための平和の歌です

ると、米国西海岸、カリフォルニア州に生まれ、南カリフォルニア大学に音楽専攻として進む。しかし、ハワイ行きのサーカス団に加わり、ハワイにとどまり続けて詩や歌を書き続けた。彼の最も知られた仕事は、シベリウス作曲の「フィンランディア」に詞を付けたことである。その時、ストーンは22歳であった。そのほか、ハワイに題材をとった詩やミュージカル作品を書いた。人となりについては、ある評論として次のように引用している。

“ [Stone] does not sing of the palms and the surf, but of the earthy human beauty which is the heritage of the islands”

直訳すれば、“ストーンはパーム椰子や波を歌うことはなかった。しかし、（ハワイ）諸島の遺産である土着の人々の美を歌い上げた”、ということになる。つまり、観光客の目を引く椰子や波には関心をもたず、ハワイの先住民族の美德に心打たれたということである。ハワイはかつて独立王国だった。しかし最後のリリウオカラニ女王が幽閉され、1898年には米国が力づくで併合し、ハワイは米国の準州となった（50番目の州に昇格したのは1959年）。このことからすると、ストーンはハワイ先住民族に深い理解をもち、偏見にとらわれない自由な精神の持ち主だったようだ。

4. 関 忠亮の日本語詞

次に解き明かさなければならないのは、ロイド・ストーン^{ただあき}の英語詞を日本語詞につくりかえた関忠亮（1915～1994）の業績である。関忠亮は「うたごえ運動」の提唱者関鑑子^{あきこ}（本名：小野鑑子）の弟。関忠亮の日本語詞を下に掲げる。

ロイド・ストーン^{ただあき}の英語詞と比べて、どうだろうか。私の直訳はゴツゴツとして分かりにくいと思うが、両者の根っこは同じだと感じる。海の青さと空の青さ、草と木、（日の）光、遠く離れた国も同じ光に映えている。イメージは同じだ。根底に共通するのは平和。しかも、忠亮の訳詞は、音の連なりに無理なく溶け込んでいる。見事な日本語詞である。

忠亮について調べているが、きわめて資料が少ない。ただ、フィンランディア讃歌の日本語詞については（株）音楽センターの協力を得て、重要なことがつかめた。音楽センターは、うたごえ運動の楽譜を出版する役割を果たしている。同センターによると、1956年5月1日発行の「青年歌集」に掲載されている。さらに調べていただくと、1982（昭和57）年に出された「関忠亮作品集」にも収められていて、この日本語詞は「1952年9月、東京文化協会コーラスのために訳した」とのメモが付けられたいるそうである。これによってこの日本語詞は1952年9月に生まれたということになる。1950年6月から始まった朝鮮戦争は膠着状態が続き、休戦協定も成立していなかった。忠亮はシベリアに抑留されていたというから、平和への希求は強く、また、うたごえ運動は再び戦禍に巻き込まれることを恐れ平和を求める運動でもあるから、ロイド・ストーン^{ただあき}の英語詞に強い共感が生まれても不思議ではない。

関 忠亮による日本語詩（1952年）

七つの海越え響け

遙かの国の人へ

^{ふるさと}
故郷の野に歌える

私の希望こそ

世界のすみまで同じ

平和への歌声

青き空の色深く

木立も草もひかる

我が祖国よ若者よ

他国の山もまた

同じ光に映えるを

共に願ひ歌え

4. 唐沢史比古の全曲日本語詩

最後に取り上げるのは、唐沢史比古^{ふみひこ}による作詞編曲による「フィンランディア讃歌」全曲版である。コスケンニエミ、ロイド・ストーン、関忠亮、そしてここでは取り上げていない堀内敬三の日本語詞は、美しい旋律「フィンランディア讃歌」と呼ばれる箇所言葉（詞）を付した歌曲である。同じ構成で、讃美歌「やすかれ わがこころよ」もある。

それに対して、唐沢は全曲に詞を付した（全214小節）。その点に於いて、きわめて意欲的な作品である。唐沢全曲版を例にとってみると、序奏は23小節にわたり、ピアノによる重苦しい響きと悲痛な響きが交錯することから始まる。合唱は24小節から始まる。ついでに云うと、コスケンニエミやロイド・ストーンの歌は、132小節から179小節までの48小節である。全曲版では、この箇所に関忠亮の日本語詞を採用する。つまり、ロシアのマトリョーシカ人形のように入れ子構造になって取り込まれている。これは、関忠亮への敬意を表したものだだろう。交響曲の全曲に詞（詩）を付す例では、スメタナの「モルダウ」がある。

そのほかの詞は、美しくも厳しいフィンランドの自然を歌いながら、圧政への抗議と平和への闘いが織り込められる。Andante sostenutoからAllegro moderatoへ、さらにAllegro、Moderato con espressへ、最後にAllegroとめまぐるしく転調しながら、約8分間の演奏となる。転調は原曲に沿って行われているようだ。日本語を各調性にあわせて紡ぎ出していくことは、大変な作業となるはずだ。

唐沢史比古は1950年の生まれ。東京音楽大学を卒業して、長野県で合唱指揮者をつとめながら作曲活動を行っている。わらべ唄から民謡、仏教音楽、クラシック音楽など編曲・作曲の題材は広い。長野オリンピックでは、組織委員会の儀典課主幹を務めた。「フィンランディア」全曲の日本語詞について、編曲者としての解説は見出せないが、楽譜には「1980・8・20編曲 2014・1・6編曲改」と記されている。楽譜としての出版は2014年2月とある（出版：Marf音楽企画）。

唐沢史比古による日本語詞（1980年・2014年改稿）

オーロラ空高く	いざ共に おそれず進め	(以下、関忠亮訳)	いざ 友
妖しく雪に映えて	高き希望をもて	七つの海越え響け	いざ共に
移りゆく	歌え 高らかに歌えや	遙かの国の人へ	おそれず進めや
	平和を讃えて今こそ	故郷の野に歌える	おそれずゆけ
流れる空 震える雲		私の希望こそ	遙かな平和を讃えよ
愛しき大地よ	小さき胸に	世界のすみまで同じ	
森よ湖よ河よ	想いを秘めて	平和への歌声	歌えや いざ
故郷遙かに	燃える 若き		歌えや いざ
遠く去りて 君に	命のかぎり	青き空の色深く	愛こそすべてと
ああ！ 我が想い		木立も草もひかる	いざ
届け 今	いざ 友	我が祖国よ若者よ	
届けよ 今	いざ共に	他国の山もまた	
	おそれず進めや	同じ光に映えるを	
みよ	おそれずゆけ	共に願ひ歌え	
雄々しき人	雄々しき人	(関忠亮訳終わり)	
戦いに立ち上がれ	戦いに立ち上がれ		